

鐵舟

再復刊第71号



令和六年 秋号

鉄舟 再復刊第七十一号 目次

臨濟録提唱抄録(一)	・	垣塚 玄了	2
第二維新運動の系譜	・	岩立 実勇	5
細川道彦老師(一)来山	・	田波 宏視	13
現代に求められる創造性魂	・	大森 悠生	14
令和六年度(一)寄付者(一)尊名	・		23

表紙 『山岡鉄舟居士書『半篙寒碧秋垂釣』』
裏表紙 高歩院 聯芳塔、祠(弁財天)

趣旨

我々同人の誓願は、要するに正見の体現であり、その生活化である。正見とは無我の正覚に外ならない。これこそ、そしてこれのみが、人生の唯一の指導原理である。何人と雖もこれなくして人生を正しく生き得るものではない。
われわれは、この誓願ゆえに、久しく鉄舟会に拠って互いに切磋琢磨してきた。
いまはこの誓願ゆえに、その正見を各自の専門の道を通じて表詮しようと思う。禅に、書に、画に、剣に、そして詩に、もとより正見それ自体は絶対的な道理の眼である。ではあるが、一面それは邪見と相対的な境界をも含むものである。その立場においては、われわれは邪見に対しては仮借なく折伏してゆこうと思う。われわれのこのささやかな営みが、願いの彼岸に果たしてよく達しうるか否かは、ひとえに同憂の高士の賛助による外はない。希くば絶大の庇護を賜らんことを。

信条

- 一、われわれは、自己と世界についての正しい見方(正見)と、正しい生き方(正精進)即ち無我の正覚に立つて万世のために泰平を開くべき自覚と責任とを明らかにしよう。
- 一、われわれは安易な妥協を排し、孤高真実の道を独往するとともに、あくまでも師承を尚び、道交を厚くし、万物一体宇宙共生の真理を実践しよう。
- 一、われわれは一切の悪に対しては仮借なく折伏するが、徒らに世事の非に激して焦燥に陥ることなく、一面風雅の道に逍遙するゆとりを養おう。
- 一、われわれは、自己を真実人体として現成すべく、日常つとめて打坐し、姿勢を正し、呼吸を正し、想念を正し、自己の周辺から漸次世界を正化しよう。

鉄舟会同人

臨濟録提唱抄録 (一)

提唱 垣塚 玄了老師

抄録 齋藤 健

臨濟録開講 偈

五逆罪聞雷怒嘆 五逆罪、雷怒り嘆るを聞く
真人無位面門伸 真人 無位にして面門に伸ぶ
孤明歷歷自由身 孤明歷歷 身自由にして
石火光中分主賓 石火光中 主賓を分かつ

(四料簡)

師晚參衆に示して云く、有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、ある時は人境俱奪、ある時は人境俱不奪、時に僧ありて問う、如何か是人境俱不奪、師云く煦日發生して地に鋪く錦、嬰孩髪を垂れて白きこと糸のごとし、僧云く、如何か是人境俱不奪人、師云く、王令已に行われて天下に偏し、將軍塞外に煙塵を絶す、僧云く、如何か是人境両俱奪、師云く、并汾絶信獨處一方、僧云く、如何か是人境俱不奪、師云く王寶殿に上り野老謳歌す

有名な四料簡です。

師晚參衆に示して云く、有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、ある時は人境俱奪、ある時は人境俱不奪

夕方の講義の時に大衆に示した。ある時は人をとつて境は残しておく。ある時は境を残して人を奪つてしまふ。あるときは人境ともに取つてしまふ。ある時は人・境ともに取らないと言つたと。そうしたら、ある僧が一つ一つ聞いていったわけです。

時に僧ありて問う、いかなるか是人境俱不奪境

「奪人不奪境」、人を奪つて境を奪わないというのはどういふことですかと問うた。

師云く煦日發生して地に鋪く錦、嬰孩髪を垂れて白きこと糸のごとし。

衣川先生によれば「煦日」というのは穏やかな晴れ間「發生」は農作物が見事になつていくことだそうです。春になつて穏やかな日になつて、農作物がよく育つという事です。「地に鋪く錦」というのは、カゲロウのことだそうです。カゲロウが発生し「嬰孩」赤ちゃんが髪を垂れて真つ白だと、こういうふう臨濟禪師は答えました。

お日様が穏やかに照れば、当然農作物が伸びてくるわけだし、カゲロウも出てくる、子供の髪の毛は本

に細いから、そこにお日様が当たれば反射して白く見えます。そういうことですが、衣川先生は「地に鋪く錦、嬰孩髪を垂れて白きこと糸のごとし」というのは両方とも妄想のことを言うのだと解説されています。あるお経の中にそういう譬えが載っているそうです。

「奪人」は「お前もそうやって、ああでもない、こうでもないって言ってるけれども、全て妄想だ」と人を全面否定しています。一方で、お日様が出て、農作物が出来てきているという。それは妄想でもなんでもない事実の全面肯定です。とかく、事実が間違つて人が正しいと解釈しがちです。このことの全否定です。

僧云く、いかなるか是れ奪境不奪人 師云く、王令已に行われて天下に偏し。將軍塞外に煙塵を絶す

王様の命令が天下に問題なく行われて、隅々まで行き届いている。そして戦う兵士は、例えば万里の長城の方に居る將軍も、狼煙を上げることがない。天下太平だということです。天下泰平だったら何もしなくてグウグウ寝ていたつても良い。天下泰平の時には、政治がどうのこうののだとか、議論することもないでしょう。何か問題があるからああだ、こうだつて言うので、みんなが食べて何も問題なかったらば、わいわいがやがや言う必要はないわけです。境は不問、

そこに人を奪うも奪わないもないということです。

僧云く、如何か是人境両俱奪

人・境ともに両方とも取ってしまうということです。

師云く、并汾絶信、獨處一方

この時代、并州、汾州という州があつたのですが、もう晩唐ですから、臨濟禪師が居られた北方は非常に治安が悪かつたようです。どんどん地方が独立している。そういう中に并州、汾州という州もあつたということです。臨濟禪師は河北州ですから近くです。「絶信」は、俺はもう中央政府とはコンタクト取らないということ、「独処一方」俺たちは俺たちで一方的にやつていくのだと言うことです。これは天下大乱です。人・境、両方とも奪ってしまう。奪うというよりは、もう奪うも奪わないも問題にならないくらいだと。

僧云く、如何か是人境俱不奪

いかなるか人境俱不奪というのに対して

師云く王寶殿に上り野老謳歌す

王様が政治の壇に登って政務を執るのですが、一方で、「野老」農夫は仕事をしながら農作業の歌を歌っている。

四料簡は、**奪人不奪境、奪境不奪人、人境俱奪、人境俱不奪**、この四つですが「人」とは何か? 「境」と

いうのは何ですかと問うことから始めましょう。

「人」とは個人、「境」とはその自分個人の周りのことであると理解するのが一般的だと思います。そう解釈すると奪人不奪境は、私どもが普段行っていることだともとれます。仕事の上で自分を殺して相手を立てる。お客さんのところでペコペコして、怒られて、「すみません」、「御説ごもつとでもですと」。

奪境不奪人はお客さまのところから一步出て飲み屋にいつて「何言つてんだよ、あのお客さん」などと文句いいながら一杯飲んでるのが奪境不奪人と解釈できませんか。

人境俱不奪。あなたも私もないじゃない、もう一蓮托生です。同じ釜の飯を食うところです。そうなる時も日常であります。

人境俱奪というのは、俺もダメだけど、あいつもダメだな、そういうものではありませんか。こう解釈すると「四料簡」も普段行っている我々のレベルを、仏法から見たものだとして理解できませんか。少しは親近感が湧くでしょう。

少し見方を変えると奪人不奪境は「奪ならば人、不奪ならば境」と読めます。奪、自分が空になってしまえば真人が現れ、不奪、ああでもないこうでもない、

もやもやすれば境に陥ってしまう。真人が消えてしまうこと。

奪境不奪人は無理矢理に奪そうとすれば、悟ろうと思えばそれは逆に遠ざかる。奪の意志を持ちながら不奪であれば真人となるんだと。

人境俱奪。人境俱不奪を一对のものとして読んで「人境ともに死に、人境ともに生きる」、「法は人とともに生き、人とともに死ぬ」と読めませんか。

人という「真人」は、そのものだけでは現れることができませぬ。我々のバックグラウンドとして「真人」はずっとありますがこの糞袋の自分があつて初めて出てこられるのです。しかし糞袋が糞袋のままであつたら「真人」は出てこられないのです。

そこに修行の意義を認めるのです。このように解釈してみますと、四料簡も観念論だけではなく実践を意識することに近づくのではないのでしょうか。

山岡鉄舟さんに、ある人が臨濟録を講じていただきましたとお願ひしたら、「分かった。ちよつと道場へ来い」といつて、道場で竹刀を振つた。そして帰つてきて「わかつたか？　これが俺の臨濟録だ」とおつしやつた。人境俱不奪の面目躍如です。

(二〇二四年六月十五日)

第二維新運動の系譜

(前原一誠、二・二六事件、大森一聲)

岩立実勇

はじめに

今年の六月一日、島根県出雲市宇龍町の日御碕コミュニティセンターにおいて開催された「第二回日御碕ゆかりの前原一誠講座」に講師として招かれ、講演を行った。同地は、明治初年の土族反乱の一つ、明治九年の萩の変の際、その首謀者前原一誠等が捕縛された地である。この講座は「前原一誠を再評価する会」の世話人、宍道正年先生が同センターの自主企画事業として開催されたものである。宍道先生は、島根県古代文化センター長や島根県埋蔵文化センター所長などを歴任、剣道家でもある。平成十五年には、島根県埋蔵文化財調査センターで、天皇皇后両陛下(現上皇上皇后両陛下)を、案内申し上げている方である。私が同地で講演するのは今回で二回目である。最初の講演は元号が変わった直後の、令和元年六月に同じく宍道先生によって企画された「第二回全国前原一誠サミット」で行った。これは前年に開催された第一回の講師で、その

講演の約九ヶ月後に急逝された松陰神社宮司青田國男氏の推薦による。これまで歴史の講演などの経験はなく躊躇したが、学生以来三十年余、わが志としてきた前原一誠の名誉挽回にほんのわずかでもお役に立つことができればと考え、引き受けた次第である。

青田氏が亡くなる直前二月に、講演についてご助言をいただくべくお電話を差し上げた際は既に入院中だったが、そのことは一言も仰られず、「前原一誠サミットの講演、期待しちよるから」と激励してください、それが青田氏との最後の会話となった。耳に残るその声は今も私を奮起させること限らない。

今回、日御碕へ向かう直前に、急遽出席が叶わなかった青田氏の未亡人隆子氏から手紙が届いた。その中に何気ない感じで「前原一誠大人によろしく」という一文があったが、何故か気になり急遽予定を変更、前日に山口県萩市土原にある真言宗のお寺弘法寺境内の前原一誠の御墓を参拝することにした。五月三十一日、宿泊した小郡でレンタカーを借り、雨の中萩へ向かった。弘法寺に着き、前原一誠の御墓に参拝、講演に先立ち改めて前原一誠の名誉恢復に尽力することを墓前に誓うと不思議なことに雨が上がった。その後、土原の前原宅に電話を掛けた。御宅は前原

一誠の旧宅で一誠の令孫故前原彦八氏の御夫人美代子さんが独りで長らく守っていたが、前年くらいから体調を崩され施設に入っていることを聞いていたので、好物の鳩サブレを御子息の千尋さんへ預けるために訪問した。ところが玄関に出られた千尋さんから、美代子さんがこの四月に亡くなられたことを知らされた。いつも私の前原一誠の名譽恢復の活動に対して、「あなた、感心だわねえ」と感謝と期待の言葉をかけていただいていただけに、大変残念であった。令和元年の講演前にお訪ねした際、当時九十二歳だった御夫人が、自らの手料理を振舞って下さったことなどを懐かしく思いながら、祭壇の御遺影に手を合わせた。

翌日の講演では、前原一誠大人、青田國男さん、美代子さんの御霊を背負って講演したことは言うまでもない。

一、前原一誠と私

前原一誠は長州・萩の人、吉田松陰門下の逸材で、幕末の尊皇攘夷運動に高杉晋作、久坂玄瑞らと奔走、戊辰戦争では北越戦争に参謀として指揮を執り、維新政府に於いては越後府判事から中央政府の参議、兵部大輔という重職を歴任するも、維新政府の行き方に失望し下野、明治九年

十月、第二の維新を目指して挙兵するも出雲宇龍港で捕えられ、萩で処刑された。

私が前原一誠に関心を抱いたきっかけは吉田松陰からで、前原一誠の名を初めて知ったのは高校生の時に読んだ池田諭の『松下村塾―教育の原点をさぐる』だったかと思う。その時はそれ切りだったが、幼い頃から「誠実」という言葉が好きだったので、「一誠」という名前が強く印象に残ったことを覚えている。その後も松陰への興味が続き、松陰について知れば知るほど、松陰の生き残った弟子たちは、松陰の教えに忠実だったのであるか、彼らの作り上げた明治政府は、またその後の大東亜戦争敗戦までの過程は、松陰の理想のものであったのであろうかと疑問を抱くようになり、では松陰の思想の正統はどこにあるのか、正統な継承者は誰なのかを考えるようになった。

その頃、大学二年の時に出会った本が、奈良本辰也の『評伝 前原一誠』だった。背表紙に書かれていた「その考え方の潔癖性は西郷を凌ぐ」という意味の文句に惹かれたからである。その後手あたり次第前原一誠や萩の変の史料、文献を収集し続けていったが、そのどの資料からも、萩の変が、それまでの研究者達が言う「士族の独裁政権樹立を目標とした守旧士族の叛乱」等とは読み取ることでは

きなかつたのである。

私は大学時代だけでも、萩へ四度程訪れている。前原一誠、萩の変関係、吉田松陰関係の史蹟を巡拝するのが常であったが、何度目の時だったか、前原一誠の命日十二月三日に弘法寺の御墓に参拝した際、ご遺族が夫婦でお墓詣りをされていらつしやるのに出会った。思い切つて声を掛けたところ、毎年十二月三日には、一緒に処刑された他の六士の御墓も巡拝されているのだとうかがい、流石「誠実人に過ぐ」と松陰に評された前原一誠のご子孫だと感激したものだ。今思えば、このご夫婦は一誠の令孫故前原彦八氏と後に親しくさせていただくことになる美代子夫人だったのである。

いつしか前原一誠の名誉恢復を自分の人生の志の一つとするようになったのだが、その志を果す上での最大の転機は、第二維新運動の系譜に連なる大東塾・不二歌道会の祭典での青田國男氏との出会いであった。青田氏は昭和五十一年の萩の変百年祭の頃から、前原一誠の顕彰活動をされていたのである。

私の志を知った青田氏から平成十八年の萩の変百三十年祭にお誘いを受け、鎌倉から十二時間夜通し車を運転して松陰神社での祭典に参列、この時に青田氏から前原美代

子様をご紹介いただいた。その後、吉田松陰先生百五十年祭にもご招待いただき、松陰先生のご子孫達、前原美代子さんと一緒に撮っていただいた贅沢な写真が残っている。

それ以降、一層前原一誠の名誉挽回への決意を強め、平成二十九年、一つの論考としてまとめ、不二歌道会機関紙『不二』に「前原一誠試論」として一年に亘つて連載した。

再来年、第二維新運動の系譜に連なる大森曹玄老師の三十三回忌の令和八年は、奇しくもその源流、わが前原一誠の百五十年祭の年でもある。この節目の年に向けて一本の本にまとめるべく、更に鋭意努力している最中である。

二、前原一誠―その人物評価

私が興味を持った頃、前原一誠など知名度も低く、その人物評価はひどいものであった。同じ不平等土族の反乱と位置付けられる西南の役の西郷(南洲)と比べても格段の低さである。一般的な評価としては、私が初めて前原一誠の名を知った池田論の『松下村塾・教育の原点をさぐる』に書かれている次の様なものであろうか。

「一誠は明治政府の不正不善を追及して立ちあがった。私利私欲にふける明治政府を糾弾した。しかし、彼は、明

治政府の人々以上に、おくれた意識、古い意識にがんじがらめになっていた」「才と識の欠如のために、結局は、日本を反動化させる動きでしかなかった」

もつとひどいのは、国民的歴史作家と言われる司馬遼太郎で、『飛ぶが如く』の中で前原一誠の事を、「元来世界認識に欠けていた」「かれは政治や人間という広い課題において、めずらしいほどに鈍感な―もしくは愚かな男ではなかったか」と書くのである。

昭和九年に前原家の委嘱を受けて一誠を顕彰するべく書かれたはずの妻木忠太の『前原一誠傳』でさえ、「同じく吉田松陰の門人で、時勢と共に推移しえなくて、茲に至つたことは実に遺憾であつた」「これ等の変乱はその手段としては共に誤れるものにして見解も必ずしも正鵠を得たりとは云ひ難きも……」などとある。

この様な低評価の主な原因は、いくつか考えられる。

第一に挙げられるのはその叛乱の規模であろう。西郷の西南の役が約四万の兵力で七か月にわたる戦いであつたのに対して、萩の変は数百名ないし千余名といわれ、わずか十日余りで鎮圧されたこと。

二つ目は最期の身の処し方の違いであろう。西郷の城山での自刃という潔さに比べ、一誠が戦場から離れ生き延

びたことは、武士に値せず卑怯という評価である。

三つ目は、西郷が明治政府を担った郷党薩摩人にとつて先輩格であり、反乱後も比較的好意的に扱われたのに対して、一誠は伊藤博文や山県有朋ら同じ松陰門下生や同年配の井上馨らいわゆる長州三尊などと対立し、その彼らが長く権力の座にいたことも不当に貶められた要因と思われる。

例えば、一誠と敵対した木戸は萩の変の際、その日記に「前原元来主論とするものなく只嫉妬不平より生ず、終に今日の如き大失策を生じ、山口県士族の面目を汚すこと容易ならず」と記し、品川弥二郎は書簡の中で、前原が戦場から離れたことを「評判に負かざる前原の臆病思ひやられ申候」「流石評判通り之前原に負かすと云ふへし、一笑々々」などと記して貶めている。

しかし、近代日本を代表するジャーナリスト三宅雪嶺は『同時代史』の中で、「前原は西郷ほど重んぜられざれど、その重んぜられざるは長州が薩州よりも小藩にして兵数少なきに因ること多く、薩に生るれば、更に重きを加へたるべし」「長州は明治三年大楽（源太郎）等が事を起こして失敗し、郷党の勢を殺ぐこと多く、薩州の満を持して放たざるに及ぶべくもなく、その点にても前原が遠く西郷に劣

ると見ゆ。個人の優劣よりも環境の優劣なり」と公平な分析をしている。一説によると幕末には、薩摩藩士は全国の藩士の一割にあたるとも言われており、その兵力差は如何ともし難い。

では、実際に一誠と交流した同時代の人々の評価はどうだったのか。

有名なのは、師吉田松陰先生の一誠に対する次の評価である。「勇有り、智有り、誠実人に過ぐ、久坂玄瑞、高杉晋作と比較して「其の人物の完全なる、二子も亦八十（一誠のこと、旧名佐世八十郎）に及ばざること遠し」と評している。

一誠の真骨頂は松陰が最も愛したこの「誠実」にある。萩の変は実は単なる一地方の叛乱ではなく、全国規模に仕掛けられた第二の維新を目的とした挙兵計画だった（このことは後述する）のであるが、その同盟者たちは次の様に述べている。大森老師が師と仰ぐ人の一人で、鉄舟会道場の正面に大きな「威神」という大額の書が掲げられている福岡の頭山満は、萩の変の直前に一誠と会っている。頭山は萩の変に呼応できずに獄に投ぜられてしまうが、処刑された一誠の末路を悲しんで「前原はその名の通り、誠の人ぢやつた。志は南洲翁と同じで国家の大本を造るに在つた」

と述べている。熊本・神風連の緒方小太郎は「前原氏の人物はたかし」と評価し、一回新開（新開神宮宮司、神風連の首領太田黒伴雄）に引き合わせて見たいと言っている。

同じく一誠と同盟した筑前秋月党の首謀者益田静方は「常ニ欽慕信服スル所ノ前原一誠ト死生ヲ共ニスルモ復タ遺憾ナシ」と言い、後に山岡鉄舟翁がその滅刑に尽力した越後の大橋一蔵は「実ニ一誠ハ精國ノ精神不撓ノ人ナリト感服必ズ進退ヲ共ニセン」と覚悟して同盟している。

では、一誠は品川弥二郎の言う様に、臆病であったのか。新潟での民を思う政治を行ったことや、出雲で囚われたの身になった時の家族を思う悲嘆に暮れた文章詩歌から、優しいイメージが私にも強くあつたが、いろいろ調べていくと、武人としての前原一誠の姿が現れてくる。

松陰の一誠に与えた文章に「君の武はもと超々きゆうきゆう（勇ましい、強い）たり、また国威を助くるに足る」とある。また松陰が安政の大獄によって東送の報を受けた安政六年五月十三日、高杉に宛てた書簡でいろいろな人の人物評を記しているが、一誠については「佐世が相替らず誠實の武士」と述べている。他の人物については「…の男」や「少年」等と記しているにもかかわらず、一誠についてだけは敢て「武士」と記している。

この一誠への松陰の評価に感心した同じく松陰門下の入江杉蔵（松門四天王、禁門の変で戦死）は、洋学を学ぼうとする一誠に対して、その気質は自分と似ていて「活材」（才能豊かな）の人ではないので、洋学を学ぶのには向いておらず、「弥よ 聖賢ノ書ニテ研磨シテ長門ノ武士道ヲ維持スルノガ真ニ御奉公」になると言っている。

伊藤博文は一誠の事を「ただけいしい性格」、土佐の板垣退助は「豪傑肌」と評しているように、相当武張った人物であったようである。

西園寺公望は、「元来前原は長州人であり乍ら薩州の人間に評判のよい男であった」と後に回想している。質実剛健の一誠は薩州人や会津人と気が合ったようだ。北越戦争の際には村田新八が「子明（前原）ノ軍配ニアラザレハ（長州藩と薩摩藩は）合従スルコトヲ肯セズ」と述べている。薩摩人の中で最も一誠を高く評価したのは、吉井友実である。彼は後に明治天皇の侍補となる人で、歌人の吉井勇の祖父である。吉井は越後で一誠と同僚となり親しくなり、早い時期から中央政府の大久保利通に一誠を推薦している。山県有朋の北越戦争についての手記『こののやまかぜ』にも「吉井は深く前原を称揚し、以て長州人中罕まに見るの人物となし、前原も亦吉井の人と為りを称揚せりと

いふ」とある。

また一誠は、幕府への忠義を最後まで尽くし、籠城して抵抗した会津藩に対し、「胸中に一点の風味あるに似たり」と述べて、会津藩士の武士としての精神と姿勢に共感を寄せ、会津松平家再興のために力を尽くしている。その御礼として家老山川大蔵（造）は、落城の際に自ら刀で切り取った天守閣の襖絵『泰西王侯騎馬図』を贈呈している。

一誠は盟友である奥平謙輔を通して、浩の弟で後に東大総長になる山川健次郎ら会津藩の子弟を教育のために託された。会津藩は降伏の際、何れ藩が再興された時の為に有為な若者を親交のあった人物や藩にその教育を託したのである。

この様なことから一誠は旧会津藩士達と親しく交わったが、その中でも永岡久茂は後に萩の変に呼応して同藩士竹村俊秀等と思案橋事件を起こすことになる。この旧会津藩士達は、一誠が維新後の中央政府の職を辞して萩へ帰国する際、送別会を開いている。その時に酌をした小川涉は「前原は伶俐なる人とは見えざれど然諾を重んずる人のやうなれば……」とその誠実な人柄を記しているのである旧会津藩士達は、木戸孝允や西郷、アーネスト・サトウに主家

再興を依頼したが、最も力を尽くしたのは一誠であつた。

一誠はまた非常に謙虚な人でもあつた。参議在職中の文には「去年北伐（北越戦争）之日、誠（一誠）藩兵之間に御拔擢を蒙り、爾來虚名謬伝此の重任を受け」とあり、萩の変の口供書にも「（佐賀の変の際の）檄文世上に伝播し、大に虚名を四方に馳せ」とあり、自分が有名であることはすべて虚名であるとする人であつた。

一誠の性格を知り得るものに、萩の変で共に処刑された盟友奥平謙輔の性格と比較した市島春城（ジャーナリスト、衆議院議員、早稲田大学図書館初代館長として活躍）の回顧録がある。よく特徴を捉えていて、大変面白いので紹介する。

「前原と奥平が私の家に同棲したのは幾日位であつたらうか。私の記憶では余り長くなかつたやうである。両人の性格が全然異なつてゐるのに、よくも同室に起臥が出来たと私の父はよくいうた。両人の異なるのは其の風采のみでなかつた。一方は鷹揚で寡言であるのに、一方は性急で多感である。一方は朝寝坊で日の三竿さんかんに上るを知らないのに、一方は東方の白む前に早く目を覚まして破鐘の如き声で詩を吟じ書を読むを例とした。一方は喜怒哀楽色にははれず、端倪の出来ない所があるのに、一方は慷慨激越、

兎もすれば剣を按ずると云ふ風であつた。一方は酒を控へ目に飲んで泥酔の境に至らないのに、一方は斗酒を辞せず、酔倒すれば駒こま、雷びきの如くである。いくら相許す朋友であつても、よく起臥を共にし得たものであると怪しまるゝほどに、其の性格が異なつてゐた。但だ兩人共に同じき所は頗る生真面目であつた。」『春城随筆六種』「幼時見た前原と奥平」

春城の実家は江戸時代以来の越後の富豪市島家の筆頭分家であり、水原の広大な邸内の一角にあつた隠宅が前原の越後府判事時代の役宅となつていた。

一誠は、越後を引払う時、春城を長州へ伴いたいと云い、春城の父直太郎に断られている。上京中の前原に、参議任官の命が下り、諸般の政務処理のため一旦越後へ行き、その帰京前日の明治二年八月三日に市島直太郎に与えた書幅を私は所蔵している。

書かれているのは『醉古堂劍掃』からの言葉で、「身世しんせいの浮名は、余、夢蝶むてつを以て之を視、断じて肉眼に受けて相ひ看す。」とある。

文意は、莊子が夢に蝶々となつた説話で、夢の中であるから実有のものではないことを言う。名声といったものは後世に定まるものであつて、現世にたとえ名声を得よう

とも、それは必ずしも真ではない。故に心眼を以て是非を察し、肉眼に生じる毀誉褒貶には惑わさる心持を説いている。

一誠は、参議という要職に挙げられても、相変らず名利に恬淡としていたことがこの掛け軸からも伝わるのである。



前原一誠

(続く)

鉄舟禅会 行事予定

令和六年 十一月

二日 (土) 例会	八時～	十時半
九日 (土) 例会	八時～	十時半
十六日 (土) 例会	八時～	十時半
二十三日 (土) 例会	八時～	十時半
三十日 (土) 例会	八時～	十時半

同 十二月

七日 (土) 例会	八時～	十時半
十四日 (土) 例会	八時～	十時半
二十一日 (土) 例会	八時～	十時半
二十八日 (土) 例会	八時～	十時半

令和七年 一月

四日 (土) 例会	八時～	十時半
十一日 (土) 例会	八時～	十時半
十八日 (土) 例会	八時～	十時半
二十五日 (土) 例会	八時～	十時半

同 二月

例会 休会

諸事情により予定が変更になる場合がございます。随時、ホームページでお確かめください。

<https://www.kohjin.org/>

細川道彦老師のご来山

田波 宏視

七月三日（水）に、大森曹玄老師の法嗣のおひとりである細川道彦老師がハワイからご来山くださいました。

細川老師は兵庫県多可町のご出身。夢窓疎石が開かれた天龍寺派瑞光寺のお生まれで、中部工業大学（現・中部大学）で電子工学を学び、卒業後は貿易会社で設計の仕事に就かれました。しかし一年ほどで心機一転、僧侶となることを決意、修行生活に入られました。雲水時代に大森老師のお姿や講演に触れることになり青苔寺国際禅道場で大森老師の鉗鎚を受けることとなりました。

この頃ハワイの日系人で武道の達人でもあった田上天心老師が来日、大森老師の法定を見て心酔し、大森老師を開山とする超禅寺をホノルルに開かれました。大森老師は禅・法定・書の指導をされたということです。細川老師は昭和63年9月より平成6年10月の大森老師津送まで約6年間、高歩院副住職して寺務を担当されました。その後、田上老師が武道を通して獲得した「気合」を学ぶことを志してハワイに渡り、やがて超禅寺の師家を長く務めら

れました。

細川老師と垣塚老師との対談は、朝九時半から午後三時近くまでの長時間に及びました。

最後に細川老師から細川家に伝わる精拙老師の御袈裟が高歩院の寺宝としてご寄贈されました。鉄舟会の来し方を改めて教えていただいた五時間となりました。



『諸事一考』現代に求められる創造性魂

大森悠生

この文は、監査役時代の所見、教育を考える会での提言、高柳記念財同で学んだことなどを中心に、過去に諸会合・講演などで使ったいくつかの文書を二〇一一年一月十三日から二月六日の手術前の入院中に読み直し、遺稿となるのも覚悟しつつその時の観点でまとめたものである。従って一貫性に欠ける部分もあるかもしれないが、その時々々の思いの寄せ集め故にこれで良しとした。

その後、幸いにして名医の執刀によって生還できた直後に東日本大震災が発生し、手術後の入院中にエピソードの後半部分を加筆修正することとした。

結果的にはこの一月から四月は、北日本の大雪害に始まり、自らの大手術に加えて東日本大震災という、人の運命とは命の不確かさそのものであると実感させられた渦中の四カ月であった。

二〇一一年同月二十八日 記

一・プロローグ

企業の社会的責任が声高に叫ばれるようになったのは、高度成長時代の悪しき産物である公害問題からだろうか。法制化不備による政治の責任にまで及んでそれが一応の決着を見た後、一九八八年のリクルート・コスモス事件で企業と政治家や官僚との癒着が問題となつてから日本で企業倫理が特段着目されるようになった。また一九九〇年代のバブル経済崩壊後しばらくして、証券会社の破綻や損失補てん問題が多発し、このため一九九七年に大蔵省がそれまでの官指導によって銀行を守るいわゆる護送船団方式から事後チェック方式の新基準に転換した。そして二〇〇〇年の某自動車会社の三十年間にも及ぶリコール隠蔽の発覚、某乳業の食中毒事件と衛生管理問題、某食品の国産牛肉詰め替え偽装問題等々企業不祥事多発などで企業倫理に対する国民の関心が一気に高まった。かくして一旦事を起こしたら経営責任者の辞任や経営破たんに至ることを覚悟しなければならぬ時代となった。

しかし企業の社会的責任問題は時代と共に変遷しつつも絶えることがないし、政・官界では不正や隠へい、役人の不作為問題など未だに後を絶たない。その都度、法令順守

や倫理観の重要性が叫ばれ、倫理委員会花盛りである。そしてリスクマネージメント、またそれらを包含した米凶流のコンプライアンスという言葉が一般的に使われるようになり、内部統制システム構築が義務付けられた。更に二〇〇〇年頃からか、それらを包摂して広く企業の社会的責任をとらえたCSR (Corporate Social Responsibility) という言葉が脚光を浴びるようになった。

しかしそれらは多少の概念や手法の進歩はあったとしても、その本質は変わりようがない。むしろこのように、時代と共に変わる表現や些細な対策を追い求めて、法令や規範の上塗りをして複雑化するより、問題の根本をとらえて、それを正さなければ官民とも不祥事は無くなるまい。それは歴史が示していることである。それと共にグローバルスタンダードと称して米国流を取り入れ、その後追いをすることはない。我が国にはそれにも増したよき国民性と伝統があるはずである。

ではそれが何たるかを考えてみよう。そして後追いかから脱し、そのよき国民性をさらに発展させることよって、世界をリードする一流国家になる道はないものか考えてみよう。

二. 不祥事、その根幹に何があるのか

いま述べたように現代日本で企業倫理やコンプライアンスが注目されるようになったのは、残念ながら不祥事など発生してしまつた問題への対処からであるが、本来的にはもつとポジティブなものであるべきだ。すなわち、発生した問題の再発防止手段や行動を論ずる前に、経営（政治も同様）そのものの中核的課題としてステークホルダーズ（利害関係者）全体をしっかりと捉え、その人格を念頭においた取り組みが成されるべきなのだ。これが本来的な日本のアプローチではないだろうか。その意味ではすべての企業経営者が社会的責任たるものを改めて直視し、必要とあれば米国流に傾斜した経営観から転換をしなければならぬいし、同様に政治家・官僚にあつては国家的責任を直視した政治観に徹しなければならないのである。

ここでいうステークホルダーズとは企業における顧客や従業員を始めとするあらゆる利害関係者であることは言うまでもないし、政・官界においては国民とそれが構成する自治体、国家を構成する省庁をはじめとする諸組織体、そして関係諸国がそれに相当すると考えるべきであろう。このときステークホルダーズの一角のみを従えたのでは身勝

手というものであつて、全てを俯瞰する姿勢が大切なのである。従つて、求められる社会的責任観や国家的責任観はP/LやB/S、政策や政局を論ずる以前の理念たるものでなければならぬのだ。そういう理念は、過去の経済的価値観第一の習慣や利権があればそれらを捨てさつて自己の利から脱し、自らの責任を直視しなければ得られないであろう。要は無念無想になれないような者は指導者たり得ないと思うのだ。そのような確固たる理念を持ったリーダーには、そこから発する重たい使命感が備わつてくるものであり、そういう純粹な使命感からは不祥事など生まれようはずがなからう。即ちこういう使命感から、我が国の伝統的道義心や倫理観が自ずと蘇つてくるものであり、その配下の組織にも健全な風土が育つはずなのである。

三. 求められる次世代教育 その礎とは

ところが、多様化し変化を続ける現代、これだけではこゝと濟まない場合も生じてきた。時代に即した新たな発想も求められるようになり、次世代を意識した施策が必要となるのだ。

各論の一つを例にみるに、科学技術が極めて高度化す

ると、それは専門外の者には見え、理解しがたくなる。その結果、組織内或いは個人の範疇で事が進められる機会が増えてくると同時に、技術の高度化やシステムの複雑化はそれを使いこなす人が専門化、限定化される傾向も生じてくる。また専門家の流動化も事を難しくしている。このような環境下、先に述べたような規範の上塗りでは対処し切れなくなるだけではなく、純粹な使命感を持ったリーダーの道義心もその配下の組織に及びにくくなるのだ。そのため研究開発に従事する技術者・研究者個々の、そして開発された技術やシステムを使う側の道義心や判断力が最も有効な問題予防策とならざるを得なくなるのだ。

同時に、このような時代は透明性を高め、孤立を防ぐことが重要であるとよくいわれている。ところが、最近のようにネット社会特有な、人と人との会話や対面によるコミュニケーションが苦手な人々が増えてくることはこれに逆行する現象である。つまり仮想現実社会の憂慮すべき新たな問題である。携帯電話やメール、ブログなどの新たなコミュニケーション手段がいやでも発達する中で、顔を合わせ、手を握り合い、腹を割つて語り合う、旧来の対話の大切さを改めて考えてみる必要がある。

科学技術の発達もたらす問題を一例に挙げたが、それ

に限らず日常生活や企業活動など、あらゆる分野において、このようなわが国で伝統的に人々が社会生活を円滑に営むために必要とされてきた対話や和の心、道義心といったものは高度化したICTの時代、ネット型孤立社会においてこそなおさら意識し、人間関係のベアシックなものとして大切に努力がなされなければならないのだ。そしてそれらは知識として得て済むものではなく、人の心すなわち人格そのものであるから、幼少の頃からの家庭教育、義務教育段階で大切に育まれるべきであろう。その結果が社会風土を醸し出して、改めて国の文化的価値として定着し、企業活動や政治活動などの社会的責任観につながって行くはずである。

かくして、戦後軽視しがちであった、本来わが国民が持つていた道・誠・仁・情といったものを改めて見つめ直した道徳教育が必要なのである。そこで得たものが礎となつて、その上に知的基礎を作る義務教育、専門的知識を学ぶ専門教育が重ねられてこそ初めて、それらの教育が本物の人材の育成に結び付くのである。多発し続ける古い体質の経営者や政治家、官僚による不祥事や、隠へい体質が形を変えて次世代に引き継がれないために、更にはコミュニケーションを不得手とし、組織に溶け込めない者による新た

な問題の発生を防ぐためにも、今こそそういった正しい次世代教育の構築が求められるのである。人材こそ企業にあっての最重要な資産であり、国家を構成する大切な資源であることをいつの時代も忘れてはならない。

四、創造性こそ未来への道を拓く

不祥事発生の問題から、社会的・国家的責任観に基づく純粋な使命感の必要性、そしてネット社会の新たな問題等から教育の備えとしての道・誠・仁・情を学ぶ道徳教育の必要性について論じてきた。さて、更にこれを俯瞰した立場からこれらの問題の背景を改めて考えてみよう。

高度成長時代が生み出した価値観は、米国流手法が導入されて得た経済的価値観であった。それはある意味では、戦後の貧困から抜け出すことのみが目的化した価値観であつて、国民が共に目指すべき国家的自標なき価値観であつたのではあるまいか。その上に、ICTの高度化は情報発信手段の多様化を生み、自由な情報交換といったネット社会特有の新たな“自由”という価値観を人々は追い求めるようになった。こども達から社会人、政治家に至るまでブログだ、ツイッターだと自分の言葉を自由に広く発信する。

勿論その中には重要な意志表示もある。しかし多くは意志表示の自由という手段を得て、それを行使しているに過ぎないのでないだろうか。それが行き過ぎて入学試験受験にまで「活用」したり、機密情報まで公開してしまうといった犯罪行為に至るケースまである。新たな自由という価値観はまた新たな不祥事を生み出すのである。

それは何故であろうか。経済が発展し、技術が高度化し、情報交流の自由を謳歌する現代社会ではあるが、その現実にはむしろ閉塞感ある社会と言った方が当たっているのではないだろうか。そしてそこから抜け出したいがためのささやかな手段として、意志表示という自由を求めているに過ぎないと言つては過言であろうか。

その閉塞感をもたらしている根幹にある問題を三つほどあげてみよう。先ず一つは、経済の停滞が閉塞感を招いているとよく言われるが、経済の高度な発展をそれが当たり前の社会だと錯覚をし、それに甘えている結果ではあるまいか。つまり国民一人ひとりに自らが新たな経済発展に寄与すべき立場である自覚がないという問題だ。二つ目に、人間がこの地球上で生きるために先人たちが外敵から身を守り、自然の脅威と闘つてきて、今日があることを忘れてしまつてはいまいか。安全に生きるために身に迫る危機は

常にあるはずである。その意識があれば閉塞感など抱いていられないはずである。そしていま一つは、人々はどれだけ未来に向つて自由闊達に夢を描いているであろうか。過去において描かれた夢によつて現在があるのであつて、苦しい立場であればなおさらのこと夢のある大きな目標は閉塞感から脱する力となるはずである。

それらが出来ていないのは現実を客観的に直視することによつて正しく知り、その上に立つて未来に向つて何を目指すのか、人々にその「創造性が欠如」しているためであると結論付けたい。未来に向つて夢を描いたり、危機感から脱するための創造力が働かなければ、経済的価値観もICTから得られる自由の価値観も、それらは自己中心の狭い範疇にしか活かせられず、それが閉塞感に至ると思うのだ。わが国の現代社会は、未来を目指す国家目標もなく、いまだに貧国から抜け出したいとして励んだ結果得た経済的価値観がもたらした損得至上主義のつぼにあるのである。

近年、創造性の欠如現象が至るところで現れている。その卑近な例が、今日もテレビで見える政界における消費税論議であり、それに輪をかけて他人の言動の批判や後追いばかりを繰り返す評論家やコメンテーター達であり、それに乗じて世論形成を図らんとする多くのマスコミである。夢

も危機感もないそんな論議の前に論ずべきことがあるはずである。それは国民一人一人の、すなわち国家の安全であり、新たな繁栄であろう。その為に疲弊した産業を如何に建て直し、合わせて健康・健全で外敵や自然に対しても安全で夢のある次世代社会を構築するために何を成すべきかではなからうか。これこそが創造性ある行動というものである。そういう社会を構築するための新産業たるものは、決して経済的価値観や自由の価値観に基づくものではなく、かといって物中心の時代は終わったという論にも異論がある。自然や文化を対象とした人の心を豊かにする産業、次世代農業や畜産業、水産業、林業は言うに及ばず、人間がこの地球上で心地よく安心して生きるための新たな観点に立ったエネルギー・医療・住宅・街づくりなどの新社会創造産業などがその例である。それを実現するためにこそハイテク技術を研ぎ、物づくり技術が活かされるべきであり、同時にこの国土創造産業の産物が新たな我が国の輸出産業として育成されるべきであろう。

自己中心的価値観の呪縛から抜け出さなければ創造はできないのであって、そのためには客観的観点から過去と言う事実を正面から堂々と正確に捉える勇氣をもって、その上に立って未来に向った高い志を抱く。そこに初めて創造

性ある発想が生まれるものであり、それは自然科学分野であろうが、政治の世界であろうが全て同じことであろう。国民が共に目指す国家目標を得るには、先ず国民一人一人が創造力を育むことである。そして未来を目指した国家ビジョンを描くことができる政治家を生み出さなければならぬ。

五. 学ぶべき「創造性魂」

最後に、その創造力を如何にして育むかを考えてみよう。それには創造をモットーとした多くの先人がいるが、そこから学びとるのが良からう。その一人がわが師高柳健次郎である。高柳の創造は世界で起きていることを事実としてしつかり捉え、その上に立って幸せな未来社会の姿を描くことから始まる。そこには自己の利という発想はみじんもない。それが高柳の先見性の秘訣であり、それを実現するために未知なる道を切り拓くのが高柳のいう創造なのだ。

テレビジョンの研究もそうであったし、早すぎるといわれながらも家庭用VTRを研究テーマとした時もそうであった。あまり知られていないが、リニアセレクター（線型粒子加速器）の開発など戦後のわが国国家の安全な未来を思

つてのことだった。

そして一旦決めたテーマに対して、「恒に夢をもつこと志をすてず 難きにつく」の遺訓が示すとおり、強い意思をもつていかなる困難をも克服して完成に結び付けた。これこそが「創造性魂」というものである。その間、決して驕ることなく協力者に対しての感謝の心を忘れることがない。「自分ひとりで成し得たことではありません」この感謝のことはこそが、その次のステップへの更に大きな力を得ることになるのだ。単なる発想や構想は一人でもできるが、価値ある創造には協力者が要るのである。

これはまた高柳流の人材育成術でもあるのだ。こういう山来事が、残されたノートに記述されている。ある時、恐らく前日の課題を寝ながらでも考えていたのであろうか。

「昨夜ひとつの着想あり」と、その記述は始まっていた。翌朝出社すると部下を集め、その着想を披露して部下たちからアイデアを募り、議論を重ねる。その場でまとまらなければ追及はせず、次への課題を与え後日必ず答えを導き出させる。そこに決して妥協はないが、問を与えるとともに「ありがとう」の言葉があった。よい技術がまとまれば共同で特許をまとめ、独創的アイデアを出した者には独自に特許を書くよう指導する。そして未来社会を目指す

よいテーマが決まれば実験や研究に着手する。こうして部下たちの創造性魂が育まれ、技術者としてまた人間として育成されてゆくのである。

高柳の研究ノートを紐解いてみて、若い頃のテレビジョン研究を除いて、以後は必ず複数の研究テーマを持つていたことに気づいた。一つのテーマに行き詰るとそこで留めて他のテーマを考察しているのだ。そして何らかの拍子に先のテーマでよいアイデアがひらめくと、研究はそちらへ移っていく。それは右往左往とは違う。私の友人の橋本壽之氏がノーベル賞クラスの世界の学者を対象に創造性について研究した結果、「創造は、特定の考え・知識の固執から離れ、知的に空白で『ニュートラルの場』になれた時に起きる」と結論付けている。高柳の手法も正にこれであろう。高柳にとっては一つの研究テーマは他のテーマのニュートラルの場となっているのだ。部下に考察の「問」を与えるのもそうである。これは橋本の論の通り、研究成果を上げるための創造に極めて効果的なのである。

さて、このように高柳は、技術の創造と人材の育成をあたかも車の両輪のごとくに進展させていったのである。これこそが創造性魂の表れであろう。こうして育てられた部下たちが次世代を担って行くのであるが、この技術と人材

の同時創造こそが未来社会の創造そのものに結びつくのではないだろうか。今の時代にこそ創造性魂を学び実行しようではないか。

六．エピローグ

我が国は戦後、驚異的な経済的復興を成し遂げた。しかしひたすら豊かさを求めて、目指すべき大きな国家的目標を持ち得なかったと同時に、その過程において多くの米国立シシステムを学び導入した。それらは短期的にはそれなりに大きな効果をあげたが、本来的にわが国民が持っていたよき伝統を失った。むしろ放棄してしまったと言ったほうが当たっているかもしれない。

本論では企業や政界の不祥事を例にあげてそのことを述べ、規範の上塗りでは本質的改善はできず、ステークホルダーズを直視することによって得られる社会的、あるいは国家的理念に基づく責任観から発する純粹な使命感こそが、本来日本人が持っている道義心を蘇えらせると述べた。しかし進化し続ける現代社会の諸現象を顧みるに、基本は教育が大切であり、その礎としてわが国が本来有している道・誠・仁・情そして和のこころに着目した道徳教育を今

こそ重視すべきだと指摘した。高柳の遺訓の一つに「よい科学者・技術者である前に よい人間であれ」という言葉がある。道・誠・仁・情を得たよい人間こそが国家の資源なのだ。

更に経済発展がもたらした甘えから脱し、またこの地球上で安全に生きるための危機感を取り戻し、それらを克服するための未来に向かった創造性が大切であると提言した。国民一人ひとりの創造性魂がよりよき幸せな未来社会の創造、ひいては新たな文化の創造に結びつくのであり、それはとりもなおさず一流国家への道となるはずである。

この冬、日本海側では大雪が降り続き、北海道から大陸に至る雪国で、不幸な雪害や豪雪の除雪に苦慮している情景が病院のベッドで見るテレビで連日報道されている。多くは住民の高齢化がその理由だとしているが、果たしてそうであろうか。十数年前に新潟へ出張した折に、地元の人から「以前は二階からの出入り口が必ずあったが、最近の家にはそれが無い」と聞かされたのを思い出した。近年の温暖化傾向に雪国の備えを解いたのである。今回の除雪難行や雪害は高齢化だけが原因ではなく、除雪設備や体制の弱体化の結果であることは明らかであろう。大自然の力の恐ろしさを甘く見た危機感欠落の結果なのである。温室効

果ガスによるとされる地球温暖化は人類がつくったものであり、大雪をはじめとする大自然の力はそれをはるかに超えたものであることを忘れてはならない。

この危機感欠知の事例を引いて文章を結んだのであるが、手術後の入院中に、東日本大震災が起きた。病床のテレビに映し出される津波被害のあまりの悲惨さ、そして限りない未来のある子どもや若者たちの命が失われる状況を見て涙せざるを得なかった。国家を揺るがす大災害である。

そんな中、原子力発電所の被災事故まで発生した。案の定、危機感が欠落し、平和を前提とした政府や東電はリスク管理の基本である司令塔なき対応で右往左往している。安全といわれていた原発がリスク管理不備の設計であったことを露呈した。自然に対して「想定外だ」ということ自体が危機感欠如の表れである。せめてこの前代未聞の危機を前に、隠ぺいなどの不祥事が起きないことを願うばかりである。それにしても、国家の安全保障何たるかの理念を保持しない政治家にこの危機を乗り越えることができるであろうか。

その論議はさておき、これを機に被災地東北の人々はその根性を發揮して、全く新たな発想による安全な生活圏のモデルや次世代農林業・水産業の姿を創造して欲しい。そ

して東北がわが国の新たな発想の輸出産業の拠点となる。そんな大きな夢を目指した創造性魂を發揮して欲しいものである。国家としてはそれを基に、先に述べた我が国国土改造新産業を創造し、世界の人類を自然や新技術のリスクから守るような一流国家への道をつくり上げるよき機会とすべきであろう。

人がつくったものに事故が皆無ということはありません。その現実を直視し、そのリスクを恐れず正面から向き合う気構えがあるなら、多大なるリスクにも耐えられ限りなく安全な原発はわが国の技術を持ってして必ず実現可能なはずであるし、その先にはさらに安定と言われる核融合発電や自然エネルギーという未来への道もある。そして自然の力に対しての謙虚さを忘れず英知を集めれば、如何なる巨大津波にも耐え得る居住地は必ず造れるはずである。

高柳健次郎の教えのように、事実を正しくしっかりと捉え、その上に未来創造の夢、即ち国家目標を描き、志をすてることなく国民が協力し合って困難に立ち向かってそれを成し遂げる。そのような創造性魂のある日本人となって、世界をリードする一流国家への道を歩もうではないか。今こそ「恒に夢を持つこと 志をすてず 難きにつく」を實踐すべきときである。

令和六年度のご寄附者のご尊名

令和六年度も定例のご寄附を賜りました。

ここに「ご寄附者のご尊名を掲載させて頂きます。

皆さまのご厚情に深く感謝申し上げます。

誠に有り難うございました。(令和六年十月一日現在)

金地院	様	安積 節治	様
松源寺	様	阿部 浩	様
東光寺	様	磯島 瑛俊	様
法輪寺	様	上畠 京子	様
養徳寺	様	大森 慶子	様
巻菱湖記念時代館	様		
(株)大八産業	様		
鍋横の会	様		
会田 健一	様		
安藤 康彦	様		
石田 耕一	様		
岩立 実勇	様		
内田 護人	様		

川瀬 榮子	様	垣塚 思淳	様
久保田 卓造	様	北 健二	様
北村 良	様	小日向 静枝	様
三枝 徳治	様	酒井 久子	様
猿渡 知之	様	末 創一	様
瀬川 公利	様	曾根 泰夫	様
鷹取 幹夫	様	辻丸 光一郎	様
田中 民三	様	田脇 進	様
出口 圭子	様	中村 宏之	様
西川 恵	様	西村 晃	様
西村 一哉	様	野口 伸一	様
野崎 勝之	様	能津 恵子	様
花田 哲憲	様	久枝 孝道	様
平岡 公雄	様	細川 道彦	様
松井 幸子	様	松浦 克子	様
御船 涉	様	毛利 学	様
八木 忠太郎	様	山口 朔夫	様
柳瀬 一慶	様	吉川 博	様
渡部 眞一	様		

ご寄稿のお願い

本誌編集部は、読者の皆様からのご寄稿を広く募集しております。禅に関連したご自身の経験、お考えなどについて原稿を賜りたく、お願い申し上げます。文字数などに制限はございませんが、誌面の体裁を整える上で多少の手直し、校正の可能性がありますことをご了承ください。

寄稿を希望される方は左記の鉄舟会メールアドレスに是非ご連絡ください。

teshukai@aroma.ocn.ne.jp

【編集後記】

秋は立秋から立冬の前日まで、暦の上では八月七日から十一月六日頃までとされています。十月に入り、七月から三カ月間続いた猛暑が和らいだと思っていたら、再び真夏日になりました。十月としては三年ぶりだそうです。

ただし、気温とは別に日没時間は暦どおりに早まっております、五時過ぎには暗くなっております。気候の変化に敏感な人は日没が早まるこの時期から、気分の落ち込み、

体調の不良を自覚するようです。日照時間の短縮に加えて、気温が下がって来ると「冬季うつ」も本格化しそうです。あまり無理なことをしないよう自己管理、体調管理に気を付けて参りましょう。

(中村)

令和六年十月七日 発行

発行 鉄舟会

編集 鉄舟会出版部

東京都中野区中央一―七―三

電話〇三(五三三八) 九二一〇

印刷 恒信印刷株式会社

東京都板橋区板橋一―八―八

電話〇三(三九六四) 四五一一

*乱丁・落丁本がございました場合はお取り替えいたします

「鉄舟会理事会」郵便口座

00190・3・579820

